

山の本を楽しむ

藤井 論

第1回の「槍ヶ岳開山」に続き、第2回は田部重治の「山と溪谷」（岩波文庫）を紹介する。この固有名詞の元祖であり、山の出版社名・雑誌名はここから生まれている。この本は1993年に出版され20年も前のものだが、現代でも共感を持てる日本の山岳史に忘れてはならない名著である。

第2回 田部重治著「山と溪谷」

【概要】

表紙の左の人物が田部重治、右の人物が小暮理太郎を表している。田部は「日本アルプス」の名を初めて世に送った、日本山岳史の草分けである。後に日本山岳会初代会長となった小暮らと共に未開の山に踏み入り、外国にはない日本の山のすばらしさをこの本に記している。

【内容のポイントと感想】

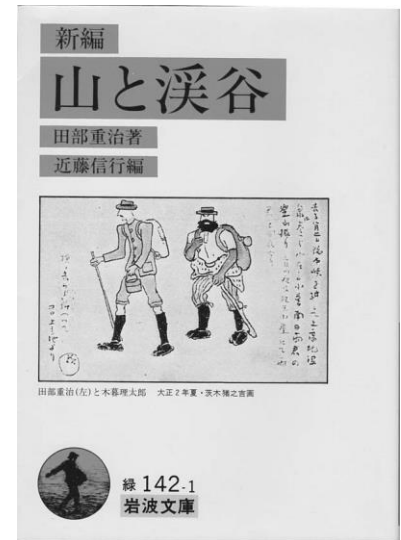
田部は「槍ヶ岳より日本海まで」の章で次のコースを踏破した様子を記している。

松本—島々谷—徳本峠—上高地—殺生小屋—槍ヶ岳—双六ノ池—双六岳—蓮華岳—黒部五郎岳—上ノ岳—薬師岳—岩井谷ノ頭—越中中沢岳—五色ヶ原—大鷲岳—ザラ峠—立山温泉—室堂—別山—立山—竜王—浄土山—剣岳—早月川—伊折—滑川

大正2年7月31日夜に小暮とともに新宿を汽車で出発、翌日に松本から馬車に乗って3時過ぎに島々へ着き宿泊している。3日目、島々谷をつめて徳本峠へ登ると穂高の全貌が現れた。峠を越えて梓川へ下り河童橋を渡り上高地温泉で宿泊。8月3日は梓川沿いに登り、二ノ股で釣りをしていた嘉門次に出会ってルートのアドバイスを受けている。この日の行程はハードで、草鞋を何度も履き替えている。槍の肩へ登りついた時は既に17時にもかかわらず槍ヶ岳に登り、殺生小屋に宿泊している。翌日は西鎌尾根を経て双六池で幕営、5日は途中ガスに巻かれ黒部五郎岳手前で野営、翌日は太郎兵衛平を経て薬師岳に登頂し、野営している。7日は越中沢岳を越えて五色ヶ原に至り幕営、翌日は立山温泉に1時に到着、次の日は長次郎らを伴い別山に野営した。10日に浄土山まで縦走、翌日は剣岳へピストン、12日は日はどしゃぶりの雨の中を早月川を下って伊折村に宿泊、最終日の8月13日は徒歩で滑川、そして日本海に至っている。14日間の大縦走山行であった。この記録の中で日本登山史を飾る嘉門次と長次郎の名前が出てくるのは大変興味深い。下段は「山を憶う」の章の一節である。

立山、剣岳、後立山山脈及び黒部川を包容せる一角は、一層、鋭い切実な力をもって見る人に迫るところがある。慥かに或人にはそれが一層の異国的な美わしい情調をもって見ると見る人があるかも知れない。しかし私には前者の方面が幽林のかなたに溪谷をひそめて容易に雪溪の露出を許さぬ趣き、高原状の山々の豊かな情趣、薬師岳の壮大、黒岳の豪壮、黒部五郎の秀麗、鷲ヶ岳の怪偉、雲ノ平の雄渾、そして凡てを貫く悠々たる感じと、現実から引上げられて夢幻の世界に入り込んでいような感じとは、私が初めて有峰から登った時の最初の印象が今も働いている所為にもよるだろうが、立山方面の印象と比較して見ると、遥かに詩的で情操的方面において優れているように感ぜられる。立山方面の形像が現実的な鋭さをもってすれば、この方面は想像的な情調を加味せるものをもってしているといえよう。

しかし田部が最も好んだ山域は、北アルプスでも南アルプスでもなく、奥秩父であった。例えば「笛吹川より荒川へ」の章は、塩山—広瀬—東沢小屋—東沢御料林—千曲川上流小屋—甲武信岳—真ノ沢—木賊ノ瀑—栃本の山行記録である。大正5年5月下旬に小暮理太郎と二人の山行であった。塩山からの交通機関はなく徒歩で広瀬に11時着。ここから東沢に入り遡行して15時に樵小屋



に着き宿泊。翌日は釜沢を越えて左に曲がり甲武信岳と国師岳の間の国境稜線に出る。不明瞭な尾根を迷いながら千曲川の源流に下り野営。3日目の朝に甲武信岳山頂に立ち、三宝山から真ノ沢に入り、沢下りをしている。道なき道を迷いながら進み、栃本の部落にたどり着いた時はすっかり日が暮れていた。栃本の民宿で宿泊し疲れをとって帰京している。ルート全体を表す地図を次に示す。次は「山を憶う」の章の一節である。この奥秩父の印象を次のような田部調の名文で記している。

山を思うたびに私は秩父を忘れることができない。初めて小暮君と二人で十文字峠の紅葉を見ながら栃本から梓山を越え、甲武信岳、三宝山、金峰山などに行った時の記憶は、いつまでも新しいものである。その後、秩父に入ること十数回、いつ這入っても秩父はなつかしい感じを与える。あの暗い幽林の間を、いくつかの峠が、武蔵から信州へ、また甲州から信州へ通っていて、それらが必ずしも地図に現われていないところに、人間と人間との不可思議な幽かなつながりがあることを思わせる。秩父の大山脈を雁坂峠から金峰まで、また雁坂から雲取までを縦走してみると、この森々とした幽林の間を昼も暗い谷に向かって、時々、人の踏みつけたあとを見出すであろう。これはそのなつかしい足跡である。甲州塩山から金峰鉱泉を過ぎ、国境山脈を越えて信州に出る道の如き地図に現われてはいないが、この地方では殆んど峠道となつて、八千尺に近いところを越えている。

私は就職してから25年間に渡って東京で生活し、登山活動の拠点は、国立市に本部を置く奥多摩山岳会(OMC)だった。OMCのホームグラウンドは奥多摩・奥秩父で、年間山行の3分の1はその山域だった。雲取山、笠取山、金峰山、国師岳など数多く登ったが、中でも特に甲武信岳周辺の山行は忘れられない。甲武信岳は山梨県、埼玉県、長野県の境にあり、千曲川(信濃川)、荒川、笛吹川(富士川)の三つの大河を源流とする。

草鞋を使った沢登りは日本独特の登山の楽しみだと思ふ。奥秩父の沢は苔に覆われて紅葉が美しく小滝が連続し、ヨーロッパやヒマラヤでは得られない日本独特の美しい景観がある。沢登りのコースでは、笛吹川東沢と荒川真ノ沢が特に印象深い。東沢のナメと紅葉のコントラストは鮮やかで今でも目に焼きついている。真ノ沢の遡行は苔蒸した小滝が連続し日本庭園のような美しさがあった。

一般道では、梓山から十文字峠を経て甲武信岳に登り、雁坂峠から栃本に下るコースがすばらしかった。特に梓山付近の白樺の森、十文字峠付近の苔むしたシラビソの森、雁坂峠から栃本に下る鬱蒼とした森などは、日本美の極みである。25年ぶりにもう一度訪れてみたいと思っている。

これらの日本の山々のすばらしさが、田部調の名文で表現されているのが「山と渓谷」であり、思わず“そうだ、そうなのだ!”とうなずきながら快感を覚えられる本である。まだ読んでない方は一読されると良いと思う。(つづく)

